

# 院外茶話

vol.125 平成 27 年 10 月 1 日

大枚はたいて休みをつぶし  
疲れ切って帰って来る  
それでも旅には言い知れぬ  
楽しみがある

## 旅に行こう



眼下に見える日本地図。

夜空を見上げてみると、星が一つ点滅をしながら動いて行った。そう言えば最後に飛行機に乗ったのは、いつのことだったろう。急に旅に行きたくなった。

旅に出るきっかけは人それぞれで、行く先も目的もばらばら。一人旅が好きな人もいれば、友人、夫婦の旅を好む人もいる。流水見物のような難所は、団体でないと行かない。

連休だから何処かに行かなければならないというのは、何とも寂しい発想だけれど、忙しい日本ではそんな旅が大半を占める。だから盆暮れ、春の連休はどこも行楽地も人で一杯。こうしてみんなが同じ行動をとれば、行く先も同じような所になる。

母の実家は葦山の小さな村だけど、大河ドラマの北条政子だったか篤姫だったか、葦山が舞台になった直後には、観光客が大挙して押し寄せた。

撮影が行われた江川邸の前の、小さな売店には人だかりができて、見たこともない名物が

並んでいた。

この混雑は潮が引くように去ったが、今度は反射炉が世界遺産になって、新たな渋滞が発生。竹輪を丸ごとてんぷらにして、うどんにのせた新名物、大砲うどんが登場した。物騒な大砲饅頭もできたけど、いつまでもつことか。

旅のガイドブックを見れば、ねぶた祭りや阿波踊り。古都巡りに紅葉の見物、カニの食べ放題。何でもあるけれど、こんな旅行に参加をすると、まずは市内見物をして、お土産屋に寄って、決まったホテルに泊まる。

翌日はガイドブックに載っていた紅葉の名所に行って、夜は旅館の大部屋でカニを食べて「あーカニだ」。それは思ったよりスカスカしているかもしれない。



人気の祭りは団体だといひ席がとれる。

観光ならば屋久杉、富士山、夏の富良野の花畑。海外まで足をのばせばグランドキャニオン、本物のオーロラだって見ることができる。運がよければ。

同じ旅でも日常のストレスを避けて、くつろいだ時間が欲しいと思えば、静かな温泉やちょっと豪華なホテルがいい。

こういう旅にグルメはつきもので、朝獲れた魚貝や、地元の野菜は楽しみの一つ。だからせっかく山奥の温泉まで行って、干からびたようなマグロの刺身は食べたくない。

鉄道マニアならば、行く先がどこであれ、

寝台特急カシオペアのラストランに乗ることが、一番の楽しみになるだろう。なにせ、日本で見せる最後の雄姿なのだから。



車窓に飽きれば本、本に飽きれば車窓。

こういう人は車窓の眺めより、カシオペアの装備品に興味を示す。行く先の名物より、車内販売の弁当を好むに違いない。

鉄道マニアやディズニーランドのリピーターは別として、用意をされたイベントや、世界遺産を大急ぎで駆け抜ける際には、せめて帰り道をゆっくり過ごしたい。

そもそも旅とは贅沢な遊びだから、ついでもとにか、もったいないという発想を捨てて、ゆとりをもった方がいい。予定を満載にしようとして、普段の忙しさがそのまま続いて、せっかくの旅が台無しになってしまうから。

巖島神社にしろ松島にしろ、行きは目的地を目指して急ぐだろう。でも、旅の計画はそこまでにしておいて、帰りは行き当たりばったりがいい。

名所ばかり訪れなくても、旅には日常から抜け出して、思いがけない何かに出会う楽しみがある。

時間を決めずに来た電車に乗って、少しでも気になるところがあったら、どこでもいいから降りてみて、その場で新たな発見をして、遠回りをしてみたり。

寄り道をしたところで、いいことは何もないかもしれない。でも、それは、ちょっとした冒険で、わくわくした時間を過ごすことになるだろう。もっとも、最近はどこにいても、携帯電話が割り込んできてしまうけれど。

でも、私はこんな思いつきで、富士山の西側を流れる川に沿って車を走らせ、何ともすばらしい風景に出会うことができた。

函館では朝からイカソーメンで一杯飲むと

言う体験もした。この時、隣にいた夫婦はイカソーメンを食べながら大声で喧嘩を始めて、何故か奥様が醤油に七味唐辛子を入れた。これが函館の食べ方だと叫びながら。

そうかと思って、自分もこっそり試してみたが、やはり薬味は生姜の方が美味しいように思う。



味はともかく新鮮なイカは透明。

こんな気まぐれの究極は歩き旅にあって、長らく東海道中膝栗毛のような旅に憧れていた。

現代人は数日の日程で、休み毎にでかける安易な旅に慣れきってしまったけど、弥次さん、喜多さんにとって、それは一世一代の大事業であった。

長い年月をかけて金を貯めて、家財道具を売り払って、酒屋のつけは踏み倒して、神田須田町を出たのが第一歩。二度と帰ることができないかもしれない旅立ち。

お伊勢様に向けて、そんな旅の楽しみは何と言っても道中にあった。風光明媚な東海道を眺めて、茶屋の娘の品定めをして、いたずらと失敗の繰り返し。名物を食べて、地酒を飲んで、洒落に狂歌。狂歌を除けば、やっていることは今と大して変わりはない。

そのお伊勢様に参った後は、急に心変わりをして金毘羅様に足をのぼし、安芸の宮島に行って、草津の湯につかって。

旅の予定はあるようでない。ないようで方向だけが決まっている。

草津を後にした弥次さんと喜多さん。今度は日光東照宮に向かうが、ここで作者の十返舎一九が逝ってしまった。その時、日光街道を歩く弥次さんと喜多さんも、突然消えた。

遊びながらフッと消える。こんな生涯の旅も悪くないかな。